

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	青柳 路子
論文題目	死の「受容」と人間形成 —E.キューブラー＝ロスの思想再考—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究はエリザベス・キューブラー＝ロス (Kubler-Ross, Elisabeth.;1926-2004) の思想を検討することを通して、死の「受容」と人間形成の問題を考察したものである。</p> <p>精神科医キューブラー＝ロスは「死にゆく過程の段階」説 (以下、段階説と略) を提起した。2年半の間に 200 人の末期患者に対してインタビューを行い、自らの病を理解した患者が、その「死にゆく過程」の中で示す「否認」「怒り」「取り引き」「抑鬱」「受容」という五つの段階を示した。終末期医療の黎明期に、米国シカゴ大学病院で行われたセミナーで示されたこの理論モデルは注目を集め、その著作”On Death and Dying” (1969) は、その後の終末期医療や死生学の展開を促すものとなった。</p> <p>本研究は、そうしたキューブラー＝ロスの思想について、その後の思想的展開も含めて包括的に検討する。とりわけ注目されるのは、死の「受容 acceptance」という視点である。最終段階を「受容」と理解したその段階説は、あたかもそれが到達目標であるかのように受け取られた。患者が死を「受容」することが望ましい治療方針であるかのように (すべての患者がそれを目指すべきであるかのように) 理解されてしまったのである。しかし彼女の語る「受容」は明確ではなかった。「断念 giving up」との違いも、「感情が欠落した」という理解も、「希望」と並行するという説明も十分ではなかった (そのため本論文では常に「受容」とカッコつきで用いられる)。</p> <p>さらに当初は、私自身の死の「受容」であった話が一般化され、愛する者 (他者) の死の「受容」も、同じ枠組みで語られるようになる。しかし「私」の消滅である死と「愛する者」の喪失である死は異なる。本論文はその違いを人間形成の問題として検討する。キューブラー＝ロスは、この異なる二つの死の「受容」を、いかなる人間形成の違いとして理解したのか。それが本論文の中心課題である。</p> <p>もう一つの課題は、キューブラー＝ロスの思想を、思想的影響関係の中に位置づけることである。彼女は段階説によって突然歴史の中に登場し、思想的背景は知られないまま、「点」として語られてきた。それに対して本研究は、彼女の思想を思想的な影響関係の中に「線」として位置づける。具体的には、シカゴのセミナーの協働者であるチャプレン (C.ナイスワングー) の神学理論に注目し、また、ユング派の分析家 (S.バウハ) との関係も明らかにされる。</p> <p>本論文は三部構成である。第 I 部 (第 1・2・3 章) は、段階説を中心に、シカゴ大学附属ビリングス病院在職中の仕事を取り上げる。</p> <p>第 1 章は、段階説が提示された最初の著作 ”On Death and Dying” に立ち返る。その理論モデルは、実は未整理のまま発表されていた。各段階の定義には一貫性がなく、相互に矛盾が生じている。彼女は段階説を提示するために著作を公表したのではなく、いまだ熟しきらない理論であることを承知で、末期患者へのインタビューの記録を多くの人に伝えようとしていたことが示される。</p> <p>第 2 章は、段階説が誕生したシカゴ大学附属ビリングス病院における「死と死にゆくこと」のセミナーに焦点をあてる。キューブラー＝ロスは、自分がセミナーを主導したと語るのだが、周囲の証言は異なる。むしろ協働者の一人・チャプレンのカール・ナイスワングー (Nighswonger, Carl.;1932-1972) が提起した「死にゆく過程」の理論が基礎になっていた。キューブラー＝ロスの段階説は、「神学生の教育を目的にした」セミナーの中で、チャプレンの理論を基礎として形成された可能性が大きい。</p>			

そこで第3章は、キューブラー＝ロスがシカゴ大学に赴任する以前に戻る。その時期、彼女は障がいのある人の臨床経験から理論を構築していた。したがってその当時の理論を段階説の直接的な理論的起源と見ることはできない。なぜなら彼女は、段階説が「死にゆく人たちのインタビュー」から構築された点を強調していたためである。

「障がいのある人」について構築された理論モデルと「死にゆく人たち」についての理論モデルは違う。その違いを彼女はどのように理解していたのか。つまり理論の「一般化」の問題である。後年、彼女は自らの説を広い領域へと適用し、多様な喪失に適用する理論として一般化した。とりわけ、自らの説を私の死の問題に限定せず、愛する者の死についても語った。そうした一般化の問題を検討する。

第Ⅱ部（第4・5章）は、主としてシカゴ大学を離職した以降の思想を取り上げ、彼女が最も影響を受けたという精神医学者ユング(Jung, C. G.)からの影響を見る。

第4章は、ユングとの関係である。ところが彼女はその影響の具体的内容について多くを語らない。ユングは「個性化」を「死の準備」と論じた。キューブラー＝ロスにおいて、この「個性化」に対応する概念は「unfinished business（人生でやり残してきた気がかりな課題）」である。それは、死を「受容」するのではなく、むしろ死を前にして人生でやり残してきたことを果たそうとすることである。例えば、他者に対する「未解決の情動」や「心のわだかまり」と向き合うような、やり残してきた「気がかり（心残り）」を解決してゆく。それは、死を「受容」することと、どう関係するのか。キューブラー＝ロスにおける「死にゆく過程」をユングの「個性化」理論と照らし合わせて検討した。

第5章は「死にゆく子ども」の問題である。キューブラー＝ロスは、シカゴ大学離職の後、「死にゆく子ども」に関わった。その際に参考にしたのが、ユング派の分析家・スーザン・バッハ(Bach, Suzan)の研究、すなわち、重病の子どもたちの自由画の分析であった。そこでバッハからの影響を探り、「死にゆく子ども」に関するキューブラー＝ロスの思想を検討し、あらためて、前章でみたユングの「個性化」との関連を問い直す。それは人生前半の「個性化」の可能性を「死にゆく子どもの個性化」として検討することでもあった。

第Ⅲ部（第6章、第7章）は、キューブラー＝ロスの思想を社会的展開という視座へと読み拓いた。考察は、私の死の「受容」という問題と、愛する者の死の「受容」という問題に分かれ、一度、日本の文脈の中で、日本社会の問題として検討し、あらためて、キューブラー＝ロスの思想を問い直すという道筋をとった。

第6章は、私の死の「受容」という視点から、闘病記が検討される。近代日本における多くの闘病記の中で、不治の病における死はいかに「受容」されたのか。興味深いのは、戦前の結核の闘病である。その時代は「修養」の思想が生きており、闘病が修養として語られていた。ところが戦後の闘病記では語り方が異なる。戦前における「結核」の闘病記と戦後の「がん」の闘病記の比較を通して、闘病における「私」の死の「受容」とその背景をなす人間形成について考察した。

第7章は、愛する者の死の「受容」である。キューブラー＝ロスは段階説を一般化し、「受容」を喪失への適応と見たが、しかし愛する者の死の「受容」について十分に論じたわけではなかった。そこで、親を亡くした子どもの問題に焦点をあて、「遺児」を支援してきた日本の「あしなが育英会」に注目する。その中で、愛する者の死を「受容」するための分かち合いと、その社会的展開について論じた。

終章は、日本におけるキューブラー＝ロスの受け止め方を確認し、最後に、あらためてその「受容」の意味について総合的に検討した。彼女にとっては常に「成長」が重要な意味を持っていたこと、「受容」で話が終わるわけではないこと、「受容」がすべてではないこと、そして「受容」が規範化される危険について確認した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文はエリザベス・キューブラー＝ロス (Kubler-Ross, Elisabeth.;1926-2004) の思想研究である。彼女の「死にゆく過程の段階」説 (以下、段階説) は、終末期医療や死生学を中心に、世界的に注目されてきたが、これまでその思想を批判的に検討した研究はなかった。

本論文はその思想全体を視野に入れつつ、焦点を死の「受容 acceptance」という問題に絞り込む。「段階説」の最終段階を「受容」としたこのモデルは、あたかも「受容」が到達目標であるかのように受け取られてきたのだが、しかし本当に患者が死を「受容」することのみが望ましい治療方針であるのか。実は彼女の語る「受容」は明確ではなかった。「断念 giving up」や「デカセクシス decathexis」との相違も、あるいは、「希望」と並行するという説明も十分ではなかった (そのため本論文では常に「受容」とカッコつきで用いられる)。

さらに当初は私自身の死の「受容」であった話が一般化され、愛する者 (他者) の死の「受容」も、同じ枠組みで語られるようになる。しかし「私」の消滅である死と「愛する者」の喪失である死では異なる。本論文はその違いを人間形成の問題として検討している。

第Ⅰ部は、段階説を中心に、キューブラー＝ロスがシカゴ大学附属ビリングス病院で取り組んだ仕事を取り上げる。そしてその段階説は、セミナーの協働者の一人・チャプレンのカール・ナイスワンガー (Nighswonger, Carl.;1932-1972) が示した「死にゆく過程」が基礎になって形成された可能性が大きいことが示される。

第Ⅱ部は、彼女が最も影響を受けたと語るユング (Jung, C. G.) からの影響を見る。例えば、ユングの「個性化」概念と彼女の「unfinished business (人生でやり残してきた気がかりな課題)」概念が対比的に検討される。その結果、ユングからの影響は直接的ではなく、むしろユング派の分析家スーザン・バッハによる、重病の子どもたちの自由画を分析した研究から影響を受けたことが示される。

第Ⅲ部は、キューブラー＝ロスの思想を、社会的展開という視座へと読み拓く。考察は、私の死の「受容」という問題 (第6章) と、愛する者の死の「受容」という問題 (第7章) に分けられるとともに、一度、問題を日本の文脈の中に引き取り、日本社会の問題として検討したうえで、あらためて、キューブラー＝ロスの思想を問い直すという道筋をとる。

本論文の優れた研究成果は以下の三点に整理される。

一、キューブラー＝ロスの思想を批判的に検討し、思想的影響関係の中に位置づけたこと。従来その思想は、思想的背景と無関係に「点」として語られてきたのに対して、本研究は、その思想を多様な影響関係の中で「線」として位置づけることに成功している。具体的には、シカゴのセミナーの協働者であるチャプレン (C.ナイスワンガー) の神学理論が注目され、また、ユング派の分析家 (S.バッハ) との関係も明らかにされた。

二、キューブラー＝ロスの思想における「一般化」に含まれる問題を浮き彫りにした点。彼女の理論は「死にゆく過程にある人たち」に固有の問題を扱うのか、それとも人生における「喪失」一般について語るのか、その点を理論的に曖昧に残した功罪を明らかにした。さらに、その思想の社会的展開についても検討している。問題を日本の状況の中に読み込み、例えば、「結核」の闘病記の分析を試み、あるいは、親を亡くした遺児たちを支援する「あしなが育英会」を検討することを通して、キューブラー＝ロスの思想の持つ可能性と不備について明らかにした。

三、死の「受容」という問題を批判的に検討した点。とりわけ、「受容」が規範と

して理解されてしまう問題を明確に浮き彫りにした点は注目される。さらに、「受容」と他の概念との関連、例えば、死を前にした「unfinished business」と「受容」との関連など、多角的な考察を通して、キューブラー＝ロスにとっては「成長」が常に重要な意味を持っていたこと、そして「受容」がすべてではないことを確認したうえで、「受容」が規範化される危険について検討している。

口頭試問においては、興味深い質疑応答が交わされた。例えば、1)「人間形成」概念について、その概念は「人格形成」「自立」「成長」などの用語とどのように関連するのか。2)「unfinished business」という概念が、心残りを解決してゆくという発想であるのに対して、むしろ、心残りを抱えながら生きてゆくという発想があるのではないか。もしくは、精神分析におけるクライン派の考えから見れば、キューブラー＝ロスの語る「成長」は、「depressive position (抑うつポジション)」に留まることができていないと捉えることもできるのではないか。3) キューブラー＝ロスが扱ったのは「生き続けたいのに死なねばならない人 (健康な人)」に限られており、「(病的に) 死を求め死に惹かれる人」については視野に入っていなかったのではないか。

しかしこうした問題は、すべて試問の中で適切な応答がなされるとともに、本人自身が今後の課題としていることから、本論文の価値を貶めることにはならないことが確認された。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年12月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降